

# 【解題】海外における賢治文学受容の現状と今後

木村直弘

「越境」は、賢治を語るうえでもはや馴染みの術語と言えるでしょう。たとえば、「賢治の『越境』」と題されたエッセイ（『宮沢賢治研究 Annual』第二四号、二〇一四年、一三〇～一三五頁）で水野達朗氏は、「賢治自身が特定分野の境界を越えた幅広い活動をしていたこと」を挙げ、それが「文学に加えて宗教や科学など多様な分野の協働と相克の場」という賢治研究の特徴の一つを形成していると指摘しています。そしてテーマ的に至極自然に、近年の海外の研究者による賢治研究の充実についても言及され、「そもそも宮沢賢治をどういう枠組で捉えればよいのか」という問題設定、概念設定に関しては、やはり「遠くから見ることの利点が生かされる場合が多い」とされています。実際、花巻市主催の「宮沢賢治賞」「宮沢賢治賞奨励賞」の歴代受賞者には、本誌に御寄稿いただいたブラット・アブラハム・ジョージ氏（第一二回）や佐々木ボグナ氏（第二三回）を含め多くの外国人研究者・翻訳者のお名前が並んでおり、水野氏の言うように「勿論外国人研究者といっても日本の大学院で教育を受けた方も多く、国内の研究との間に線を引く意味はあまりないかもしれない」という考え方も成り立ちうるでしょう。では今なぜ敢えて「越境する賢治」という特集内で以下の「海外での賢治文学受容の現状と今後」を共通テーマとする、いわば特集内特集（以下「小特集」）が組まれるのでしょうか。

そもそもこのテーマ自体は、『賢治学』発刊にあたっての検討段階当初から挙げられていたもの

の一つでした。岩手大学ウェブサイト (<http://www.iwate-u.ac.jp/shokai/rimen.shtml>) 二〇一六年三月一日現在) でも御確認いただけるように、本学は教育目標の一つとして「地域に対する理解とグローバル化に見合う国際理解力」を、研究目標の一つとして「人類的諸課題を視野に入れた、人文・社会・自然の各分野にわたる基礎研究の推進」や「地域社会との連携による新たな研究分野の創出」を、そして社会貢献目標の一つとして「地域社会と国際社会の文化的交流のための取り組み」を掲げています。賢治文学が、その母校である本学と出身地域〓岩手を結び、「人文・社会・自然の各分野」を横断し、すでに国際的に受容されていて今後発展する可能性をもっており、これらの「目標」にふさわしいものであることは、読者の皆さまにもはや自明のことでしょう。

実は、本小特集に似たテーマですすでに公表された成果としては、たとえば、宮沢賢治学会イーハトーブセンターによる「第二回宮沢賢治国際研究大会」があった二〇〇〇年の、国立国会図書館国際子ども図書館開館一〇周年及び国民読書年記念展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」の第三部「特別コーナー 国境を越える宮沢賢治」(以下の URL で確認可能: <http://www.kodomo.go.jp/anv10th/special/kenjintyazawa.html>) 二〇一六年三月一日現在) や、同センター主催「宮沢賢治生誕一〇〇年記念国際研究大会」の翌年二〇〇七年に公にされた杉浦静氏による「宮沢賢治詩・童話の外国諸語への翻訳」(「修羅はよみがえった」刊行編集委員会編『修羅はよみがえった・宮沢賢治没後七十年の展開／宮沢賢治没後七十年』、財団法人宮沢賢治記念会、四三五～四六八頁) などが挙げられます。当然のことながら本小特集がそれらの内容をなぞってもあまり意味はありません。しかし、それらにはあくまでも日本国内からの視点でまとめられたものであり、実際海外で賢治文学がどのように受容されているのか、そして今後海外での受容に関してどのような可能性があるのかということについて、海外の研究者が自分の言葉で語った文章を特集としてまとめるという試みは、(米国や中国、フランスなど個別の国々に限った研究内では先例があるもの) なかったように思

われます。

そこで、本小特集を組むにあたって、まず、かつて日本語で賢治文学に関する博士論文を執筆し現在海外在住の外国人研究者をリストアップし、この小特集テーマでの寄稿をお願いしました。さらに、より多様な国々の状況を知るため、第二段として、それらの条件には当てはまらないものの、このテーマに関して興味深い報告をしていただけるだろうと編集委員会で判断した方々に執筆依頼を行い、最終的に、アメリカ、イタリヤ、インド、ヴェトナム、エジプト、オーストラリア、韓国、台湾、中国、ポーランドについて計十名の方々から日本語による御寄稿をいただくことができました（面識もないにもかかわらず突然の不躰なノーギャラ・短期間での寄稿依頼にも快く応じてくださった執筆者の皆さまに改めて心より御礼を申し上げます）。

ただし、編集委員会からは小特集テーマをお示しし簡単な趣旨説明をしただけで、あとはテーマに則して各人の日本語作文能力にあわせ「自由に」書いていただくことにしたため、結果的に、同じ特集テーマであってもきわめて多様な内容になりました。よって、たとえば日本でも著名なロジャー・パルヴァース氏や日本国内で英語で書かれた賢治関係の文献への言及が英語圏についての二つの論考に含まれていないというような状況が起こっていますが、前述のように、本小特集の眼目はあくまでも、今後海外で賢治文学がどのように受容される可能性があるのか、その展望を得ることにあるため、敢えて追加をお願いするようなことはしませんでした。

また、英語圏だけでなく中国語圏についてもお二人に執筆依頼をしていますが（基本的に英語圏も中国語圏もそれぞれの執筆者の方には他に同じ言語圏での執筆依頼者がいることについてはお知らせしていません）、台湾は日本統治時代に日本語教育が徹底された影響も考えられるため、大陸とは別に立項されたのであり、政治的な他意は全くないことも念のため付言しておきます。ちなみに、当初台湾については、すでに台湾の大学で教鞭をとっていらっしゃる方（たとえば、台湾に

おける「銀河鉄道の夜」受容についての日本語論文も書かれている陳澧如氏などが候補に上がりましたが、『賢治学』創刊にあたっては、若手研究者が賢治関係の論文を執筆する場としても機能させるという基本方針があり、この小特集でもその方針下、執筆当時大学院研究生で博士課程進学予定の若手研究者に敢えて御寄稿をお願いすることになりました。

以下、各執筆者について姓のアルファベット表記順に簡単に御紹介しておきます（ちなみに、萩原氏、ジョージ氏以外は皆女性です）。

まず、米国を主に御報告いただいた萩原孝雄氏です。上智大学文学部英文科を御卒業後、カナダ・ヴァンクーヴァーの国立ブリティッシュ・コロンビア大学に留学され、一九八六年博士学位請求論文「The Theme of Innocence in Miyazawa Kenji's Tales」で博士号を取得、その後米国フロリダ大学ゲインズヴィル校、スミス大学などを経て、現在はオハイオ州クリーブランドにある私学ケース・ウェスタン・リザーヴ大学人文・科学学部現代言語・文学科で日本文学の教鞭をとっていらっしゃいます。海外在住ではあっても日本人研究者の視点からの報告は本小特集の趣旨から少し逸れているように思われるかもしれませんが、『宮沢賢治——イノセンスの文学』（明治書院、一九八八年）や『北米で読み解く日本文学——東西比較文化のこころみ』（慧文社、二〇〇八年）等をすでに上梓されている氏の報告は、御一読いただければわかるとおり、結果的に最も本小特集のテーマに則した内容となっています。この報告にあるように、英語圏については、（カタカナ書きだと日系人との区別がわかりませんが）萩原氏のような日本語ネイティブの研究者が英語で発表した賢治研究の蓄積があり、その受容が想像以上に進んでいるという点を改めて実感させられます。

次に、中国の黄育紅氏です。長春にある国立東北師範大学を御卒業後、宮城教育大学に留学し修士論文「宮沢賢治童話研究」で学位を得た後、千葉大学の博士課程に進学、二〇〇四年に博士論文「宮沢賢治（村童スケッチ）論——日中児童文学の史的展開を視野に入れて——」で学位を取得さ

れ、現在上海の華東理工大学外国語学院で日本文学および日本語の教鞭を執られています。中国における賢治文学の受容状況については、すでに重慶出版社編集部編の雷剛氏による「中国における宮沢賢治の翻訳と普及」(相澤瑠璃子訳、王敏編『東アジアの中の日本文化——日中文化関係の諸相』三和書籍、二〇一三年、一八三〜二二〇頁)という詳しい報告があり、当然内容的に重複するところもありますが、今回は限られた字数の中で、御自身の本務校での教育実践にも絡めてポイントを絞って御報告いただくことができました。

次に、インドのニューデリーにある国立ジャワハルラール・ネルー大学日本・韓国・東北アジア研究センターで日本文学の教鞭を執っておられるプラット・アブラハム・ジョージ氏です。氏は、国際日本文化研究センターでの共同研究の成果を、論文集『宮澤賢治の深層——宗教からの照射』(法藏館、二〇二二年)の編者のお一人として公刊されており、賢治研究者として日本国内でも著名な方ですので御紹介するまでもないでしょう。多言語国家インドにあつて、やはり共通の賢治受容のポイントは仏教関係のトピックになることがよくわかります(ちなみにジョージ氏はキリスト教徒で、一九九七年の博士論文のテーマは賢治ではなく島崎藤村でした)。

次は、オーストラリアのヘレン・クレア・キルパトリック氏です。二〇〇四年、シドニーの公立マッコリー大学から博士学位請求論文『Ideologies in Contemporary Picture Book Representations of Tales by Miyazawa Kenji』で博士号を取得され、現在は、オーストラリア南東部ニュー・サウス・ウェールズ州の公立ウーロンゴン大学法学・人文・芸術学部で日本語・日本文学・日本文化を講じていらっしゃいます。この間、岡山大学やノートルダム清心女子大学で教鞭を執られたこともあり、また、二〇一三年には、「Envisioning the shōjo [girl] Aesthetic in Miyazawa Kenji's "The Twin Stars" and "Night of the Milky Way Railway"」(二〇二二年)という論文で、オーストラリアとニュージーランドにおけるその年に発表された最も優れた日本文学関係の研究成果に対してシドニー大学

から贈られる「井上靖賞」(第七回)を受賞されています。主著『Miyazawa Kenji and His Illustrators: Images of Nature and Buddhism in Japanese Children's Literature』(110-111年)については前掲萩原氏の報告で言及されていますので、そちらをご覧ください。

次に、ヴェトナムのグエン・ド・アン・ニエン氏です。ヴェトナム国家大学ホーチミン市大学東洋学部日本学科在学中に日本政府国費留学生として名護市にある沖縄公立の名桜大学国際文化学科に一年間留学され、帰国後卒業論文「宮沢賢治の童話における幻想と現実」を書いて卒業された後、二〇〇一年日本国際交流基金の助成を受けて、名桜大学大学院国際文化研究科言語文化教育研究領域に留学、二〇〇四年に本文でも紹介されている英語論文「宮沢賢治の『銀河鉄道之夜』とルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』との比較研究」で修士号を取得されています。その後、大阪府国際児童文学館の外国人客員研究員を経て、現在は名桜大学非常勤講師を務められています。

次に、韓国の朴鍾振(パク・ジョンジン)氏です。韓国の徳成女子大学日語日文学科で太宰治『人間失格』関連の卒業論文を書かれた後日本に留学、白百合女子大学大学院文学研究科で児童文学を専攻、二〇〇五年に「韓国における宮沢賢治作品の受容」で修士号、二〇一四年に「宮沢賢治研究——韓国における受容史を中心に——」で博士号を取得されており、現在は韓国に帰国され、韓国国立の全州教育大学校で非常勤講師をされています。まさにこの小特集のテーマに関して余人を以て代え難しの方と言えましょう。

次に、ポーランドの佐々木(旧姓ヤンコフスカ)ボグナ氏です。ヨーロッパの日本文化研究・教育拠点の一つでオランダに次いで古い歴史を誇る国立ワルシャワ大学日本語学科を修了された後(修士論文のタイトルは「宮澤賢治のユートピア思想」)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻に留学、「『土神と狐』小論」で修士号、「宮沢賢治——レトリックとしての『相対性』——」で博士号を取得されました。後者の内容をまとめた『宮沢賢治——現実の遠近

法』（京都大学出版会、二〇一三年）が認められ前述のように二〇一三年度の宮沢賢治奨励賞を受賞されています。現在、日本学術振興会特別研究員RPDとして立命館大学に在籍され、京都大学大学院文学研究科・文学部スラブ語学スラブ文学専修の非常勤講師としてポーランド語の授業も担当されています。

次に、イタリアのマリア・エレナ・テイシ氏です。世界最古の大学として知られる国立ポローニャ大学を卒業後、日本に留学。白百合女子大学大学院文学研究科で児童文学を専攻、一九九九年に修士論文「宮澤賢治とイタリア文化」で修士号、二〇〇七年には「日伊文化交流関係と宮澤賢治」で博士号を取得されました。現在はポローニャ大学人文・文化遺産学部で日本語・日本文学を、ペルージャ外国人大学で日本語・日本文化を講じていらっしやいます。

次に、エジプトのアミーラ・サイド・アリー・ユースフ氏は、中東・アフリカ地域で最初に発足し同地域での研究者育成や日本語の普及活動をリードしてきたことにより二〇一一年度第二三回国際交流基金賞も受けたカイロ大学文学部日本語日本文学科を卒業後、筑波大学大学院に留学、二〇一二年「宮澤賢治の「少年小説」と利他意識についての考察——「新しい、よりよい世界の構成材料」と「立身出世の意味」を中心として——」という論文で博士号を取得されています。御帰国後、現在はエジプト投資フリーゾーン局に勤務される傍ら、研究と翻訳を続けられています。今回お寄せいただいた原稿は、御自身の賢治論が主となった内容で、必ずしも本小特集の趣旨に合致したものではありませんが、これまでアフリカ大陸における賢治受容について触れた文章は皆無と思われまますので、敢えて大きなカットを加えず掲載させていただきました。賢治文学普及には視覚的メディアが有効であるという御指摘は他の複数の御寄稿からも汲み取りうる内容であり、賢治文学の本質を考えるにも今後興味深い切り口となりうるでしょう。

最後に、台湾の黄毓倫（音読みは「こう・いくりん」）氏は、二〇一三年に「宮沢賢治の童話に

おける音楽性——ドビュッシー／ベートーヴェンの投影を例にして——」というタイトルの修士論文を提出し国立台湾大学日本語文学系の大学院を修了後、お茶の水女子大学大学院研究生を経て、二〇一六年四月に同大学院博士課程に入学されました。ちなみに、二〇一〇年一二月には、お茶の水女子大学が主催した「第五回国際日本学コンソーシアム——「日本」とはなにか——」に参加され、日本文学部会で「宮沢賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」における音楽的な一考察——」——「ベートーヴェン交響曲第六番「田園」と第九番「合唱」の精神——」というテーマで研究発表を行い、それは翌年、論文として『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』（第七号、二三七～二四四頁）に掲載されています。

「賢治ほど評論・綿密な学識を動員して研究されてきた詩人は、世界中でも希であろう。」（中略）「賢治のたった一篇の詩を読むにしても、学術研究となれば膨大な学識や先行研究への目配せを要求される」とは、稲賀繁美氏の言（『星と修羅と自己犠牲 宮沢賢治の心象へのいくつかの補助線』、ジョージ氏前掲編著所収、三九五頁）ですが、すでに賢治文学受容および研究が進んでいる国からまだこれからの国までさまざまとは言え、われわれ研究者が「目配せを要求される」のはもはや国内だけではないことは明らかです。しかし、そのような時代だからこそ往々にしてインターネットでの検索でヒットした文献にしか目配りしていない研究も数多くなりつつあるのも確か。それゆえ本小特集のような企画のレゾナートルは、ネットではヒットしない資料にまで「目配せ」できているかどうかにかかっていると云えましょう。次輯以降も（小特集という形ではなくなりませんが）今回掲載できなかった他の国々における賢治文学受容の現状と今後の可能性について、適任の方に御寄稿をお願いしていければと考えております。御期待いただければ幸甚に存じます。

（きむら・なおひろ、岩手大学教授）